

風と木

小川未明

風と木

広い野原は、雪におおわれていました。無情な風が、わが世顔
に、朝から夜まで、野原の上を吹きつづけています。その寒い風に
さまたげられて、木の枝は、すこしもじっとしておちついているこ
とができません。しきりに振り起こされては、氷のような空気の中
に無理やりに躍らなければなりませんでした。

「もし、もし、北風さん、そう私をいじめるものではありません。

私は、いま、春になる前の用意をしているのです。あなたが、この
野原をひとりよがりに駆けまわっていなさるのも、わずかな間で
す。北の遠い地平線のあちらへ、あなたは、やがて帰っていく身で
はありませんか。そう、私をいじめるものではありませんよ。」

と、木の枝は、風に向かって叫んだのです。

北風は、これを聞くと、からからと笑いました。

「春になれば、私は、それは北の遠くへ帰ってしまうのさ。そし
て、こんどは、南からやさしい風が吹いてきて、おまえさんたちの
頭を軽く、しんせつになでてくれるよ。けれど、あちらの池にきて
いる

雁^{がん}が頼^{たの}んで、いうのには、どうかもうすこし、元^{げん}気^きよく吹^ふいていてくれ、あんなほおじろとか、うぐいすとかいうような、人^{にん}間^{げん}のおもちやにされるような、女^め々^めしい、虚^{きょ}栄^{えい}心^{しん}の強^{つよ}い小^こ鳥^{とり}どもが、いばり出^だすのは、しゃくだというのだ……。」と、北^{きた}風^{かぜ}は、木^きの枝^{えだ}に答^{こた}えたのでした。

木^きの枝^{えだ}は、北^{きた}風^{かぜ}が力^{りき}んだので、二^{ふた}、三^みべんも、細^{ほそ}い身^みを揺^ゆすらなければならなかった。

広^{ひろ}い野^の原^{はら}の上^{うへ}には、雲^{くも}切れがして、青^{あお}い鏡^{かがみ}のよう^{そら}な空^みが見^みえていました。木^きの枝^{えだ}は、それを見^みると、無^む上^{じょう}になつかしかったのです。

春^{はる}になれば、毎^{まい}日^{にち}のよう^{そら}に、あ^あした空^みが見^みられると思^{おも}ったからです。そして、かわいらしい小^こ鳥^{とり}どもが、自^じ分^{ぶん}を慕^{した}ってやってくる。

中^{なか}にも愛^{あい}嬌^{きょう}もの^うぐいすは、ど^{どこ}か^{から}か、すばしこ^うそう^な、あ^め

色^{いろ}の翼^{つばさ}を、朝^{あさ}の日^ひに輝^{かがや}かせて、早^{はや}く^とから飛^とんできて、

「おかげさまで、春^{はる}がき^にました。あ^おなたのい^のい^{はら}香^ういは、野^の原^{はら}の上^{うへ}をいっ^{ただ}ぱいに漂^たっています。ご^{そら}ら^{たい}んなさい。空^{そら}の太^{たい}陽^{よう}までが、う^とっとりとしてあ^みなたに見^みとれてい^はるではあり^ませんか。な^{なん}という、あ^あなたはい^にい^お香^はいのす^{はな}花^{はな}でし^のう。も^{もし}しあ^のなたが、こ^のの^{はら}野^{はら}原^{はら}に咲^さかなか^なつたら、こ^{ひろ}の^の広^{はら}い野^{はら}原^{はら}は、ど^{どん}な^ににさ^さびしいで^でしょうか。私^{わたし}ばかりであり^ません。ほ^{ことり}かの^の小^{はら}鳥^{はら}たちも、こ^{かげ}の^の野^{はら}原^{はら}には、影^{かげ}をひそめて、い^ふつ^ゆま^けでもこ^こは、冬^{ふゆ}のま^けまの景^け色^{しき}でい^るにち^がい^{ない}の^{です}です

……。」

木の枝は、こういったうぐいすの言葉を思い出して、

「なに、私は、寒くたって、かまわないけれど、小さな鳥たちが冬に飽きています。私が、花を咲かせないうちは、こまどりも、うぐいすも、おしのように、どこかのやぶの中にすくんでいなければなりません。それを思うと、早く、花を咲きたいばかりに、ついあなたにも訴えたわけでした。」と、木の枝は、風に向かっていいました。

すると、北風は、さげすむように、ふたたびからからと笑いしました。

「ほんとうに、うぐいすがそんなことをいった？」

木の枝は、なつかしそうに、

「愛嬌もののうぐいすは、ほかの鳥とちがって、美しいばかりでなく、心もやさしく、私には、しんせつなのです。」と、答えました。

北風は、かつて、雪を家来にして、野原を駈けていた時分、一本の棒の上に、うぐいすがとまっていて、北風を見て、さも感歎しながら、

「北風さん、なんというお勇ましいんでしょう。数限りない雪の

家来がおありなさるほかに、あの大きな雁や、野がもまでが、みんな

あなたの家来なのです。やがて、あなたが、北の故郷へ引き上げ

なさるときには、この雪も、野がもも、雁もあなたのお伴をして、

いっしょにいつてしまうのでしょうか。ただ、不幸なことに、あなたには、私のような、かわいらしい唄うたいが相伴にいないことです。私は、あなたが去られると、この野原の女王になります。そして、私が、一声かけさえすれば、あのおじいさんのような、無骨な枯れ木までが花を咲くのですよ……。』といったことを、北風は思い出した。それで、北風は、木の枝をさげすむように笑ったのです。そして、北風は、うぐいすのいったことを、木の枝に語ったのです。

木の枝は、うぐいすが、だれに対しても、いいかげんなことをいうので、びっくりしました。

「そんなことをいいましたか？ 私をおじいさんのような無骨者と……。そして、自分を、野原の女王だと……。』

木の枝は、そんなら、自分は、じつと寒い風をも我慢をして、いつまでも花を咲かずにおいてやろうと思いました。そうしたら、どんなにこの野原は寂しいかしれない。いつまでたったって、春がこないにちがいない。そうしたら、うそつきのうぐいすはどうするつもりだろう……。』

「北風さん、私は、我慢をします。どうぞ、もつともつと強く吹いて、雪を盛んに降らせてください。」といいました。

北風は、それから、しきりに募りはじめました。